

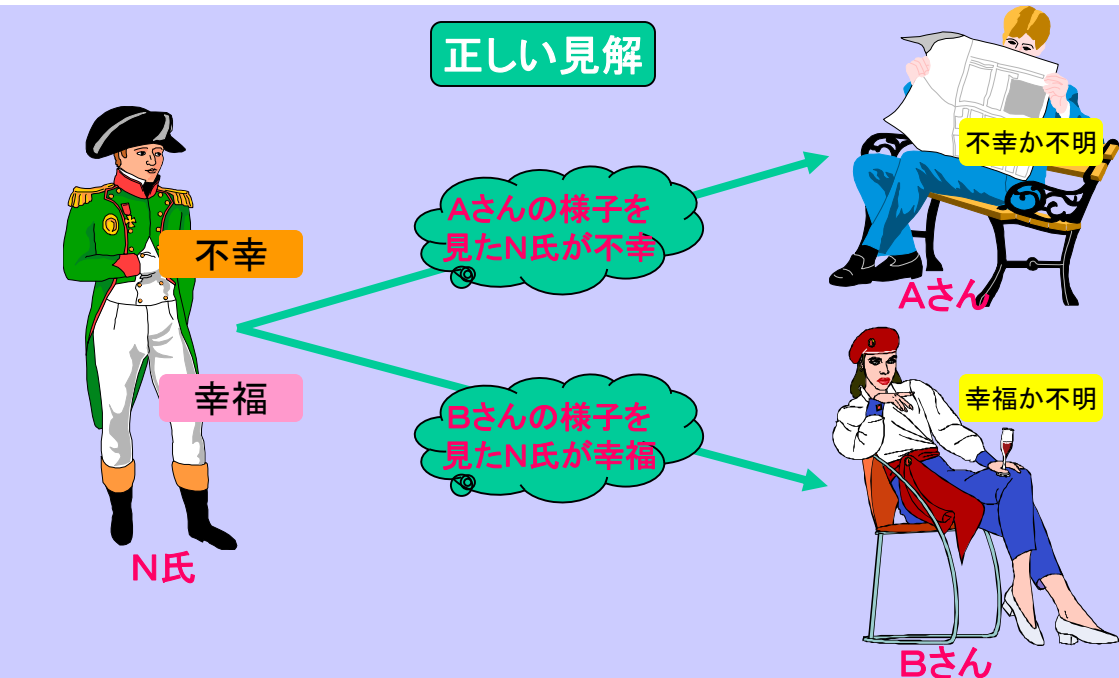
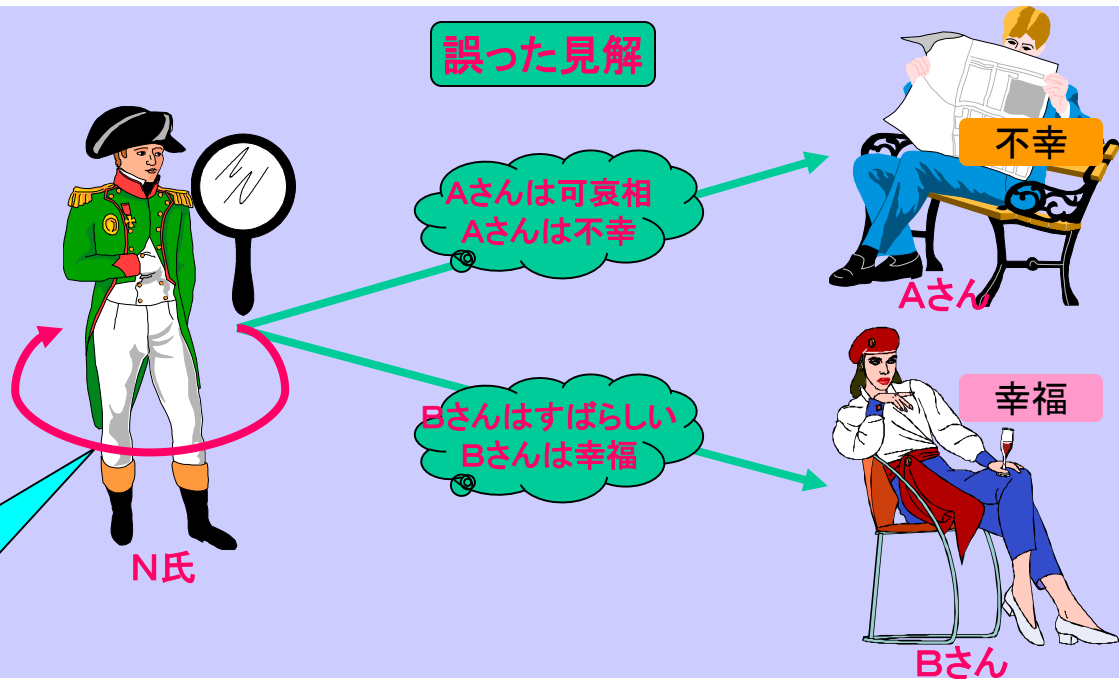
自分にとっての幸福・不幸とは

幸福・不幸の判定でよく誤解されるのが、自分の見たもの(見ている他人)が、「可哀相だ」とか「すばらしい」とか、(自分が)感じると、対象の人間そのものが、「不幸」であるとか「幸福」であるとみなしてしまう。しかしそれは相手が不幸または幸福な状態であるのではなく(なぜなら他者にとっての不幸か幸福かは、他者になってみなければ判らない。そんなことは不可能)、“自分自身”が、“世界を観察した結果”、不幸あるいは幸福なのである。つまり他者の状態により、結果として自分自身が幸福である。または不幸である。とするのが正しい。

N氏が自分自身を見て幸福または不幸を判定することは出来ない。なぜなら、自分自身は観察不可能であり、観察されるのは世界である。例えば、自分の姿を鏡で見て、服装・衣装が「立派だ」、あるいは「みすばらしい」と感じる。しかしその服装(鏡に映った自分の姿)そのものは、自分自身(観察主体)ではなく、あくまで外部(世界)である。

本当にAさんが不幸なのか、あるいはBさんが幸福なのか、それは本人になってみなければ判らない。しかし、そんなことはN氏にとっては関係ない。

余談であるが、仏教の開祖「釈迦」は、自分が国王として生まれ、贅沢三昧の生活を送っていたにもかかわらず、「この世は苦しみに満ちている」(一切皆苦)と言った。しかし彼から見れば、自分の周りの人間(自分以外の他人)は、皆貧しい、愚かである、病氣や老いに苦しめられている。それを見た彼が(心を)痛めた。そして自分自身が苦しさを感じたのである。苦しみに責めさいなまれた自分は、決して幸福ではない。不幸である。ということ。もしこの世から一切の貧しさ、老いや病いが消えたとき、はじめて釈迦自身も幸福になれる。それまで自分は、口が裂けても幸福なんて言えない。つまり彼にとって自分自身の贅沢さなんか、返って“自分”を不幸にしているものとみなしていた。



自分にとっての幸福・不幸とは

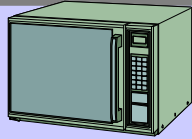
基本原理

自分は世界を観察する主体。それに対して、世界は観察される側。つまり客体。そして自分で自分を観測することはできない。自分にとって、世界の状態が良好の時に幸福といい、良好じゃない時を不幸という。

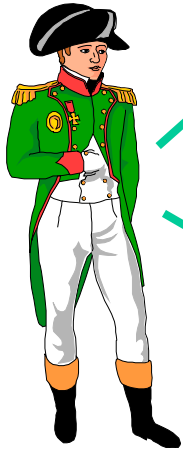
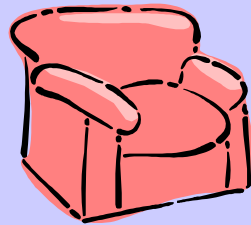
- ①自分とは世界を観測する主体
- ②世界とは自分が観測する客体

今N氏の家の電子レンジが壊れた。それはもちろん電子レンジ自体が不幸なのではなく、おいしい物を食べられないN氏が不幸なのである。同様に今N氏の愛犬が、お腹をすかしている(ようにN氏には見える)様子を見て、その愛犬が不幸なのではなく、N氏自身が不幸なのである。何か食べ物を与えて、愛犬が喜ぶのを見て、N氏は幸福になった。一方今N氏の手元に電子レンジを買い換える現金がない。N氏の不幸な状態は続く。現金が手元がないのはN氏の状態ではなく、今現在の“世界”の状態を指す。

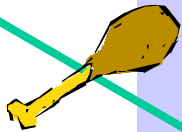
N氏にとって現在の世界の状態



電子レンジ



N氏



愛犬

